

## 研究ノート

# インドネシアの民族服飾

## ——ジョクジャカルタ及びスラカルタの服飾について——

坂 上 ちえ子

### はじめに

現代文化の進展に伴って、国際間の交通・通信などの発達により国際的な交流が盛んとなった。そして、この動向によって服飾も相互に接触し、交流し、模倣する機会がふえ、国際同化の傾向、すなわち、一般に洋服といわれる服飾の型式を採用する傾向が強くなっている。

しかし、この傾向は在来慣用の服飾をすべて廃棄するというのではなく、普段着、通勤着など活動、勤務の生活には動き易い洋服を着用するが、儀礼、儀式の場では各国民族の伝統的な民族服飾を用いるという併用方式へと衣生活を変化させた。そして、その伝統的な民族服飾も決して不変のものではなく、この国際同化の波にもまれ、生物の進化、退化の現象と同様に複雑装飾化する部分があったり、逆に簡略化される部分が出て来たりと変化を余儀なくされている。

1992年11月18日から22日まで、インドネシアのジョクジャカルタ市にあるタラカニタ社会福祉短大を訪問する機会に恵まれ、ここで、ジャワ島中部のジョクジャカルタとスラカルタにおける男女の民族服飾を見せていただくという貴重な資料収集の機会を得た。

ジョクジャカルタ、スラカルタの2つの都市も、服装については他の多くの国、地域と同様先に述べた国際同化の傾向がみられ、男女とも日常着は洋装化しており、民族衣裳は結婚式などの儀礼、儀式においてか、観光従事者が着用するだけとなっている。しかし、ジョクジャカルタ、スラカルタはいずれも、1755年マタラム王国が分裂してできた土侯国の王城の地で、ジョクジャカルタには、代々の統治者スルタン・ハムクブウォノ (Sultan Hamenkubuwono) の王宮クラトンがあり、また、スラカルタにも統治者ススフナン・マンクナガラ (Susuhunan Mangkunagara) の王宮マンクナガラが残っており、ジャワ島の古い伝統を最も良く残している地である。衣裳にもそのことがいえ、伝承された衣裳にそれぞれの地域性、民族集団を象徴する特性を認め、これを温存し、次の世代に引き継ぎたいという態度がうかがわれた。

しかし、時代の推移や社会環境の変化に遭遇すると完全な形態で伝えることは困難となる。時代や生活の変化、例えば日常生活より儀礼用として用いられることが多くなったという変化に適応するよう多少改変されて、旧態を残存させていかなければならないので

ある。

ジョクジャカルタとスラカルタの男女の民族服飾には、どういう共通点、相違点があるのか、また、服飾の国際同化という変化が進んだ結果、インドネシアの民族服飾はどの部分その変化に適応できず退化し、逆に優れた特性だとして存続しているのかを留意しながら、タラカニタ社会福祉短大で見せていただいたジョクジャカルタとスラカルタの服飾について整理し、まとめたいと思う。

### インドネシアの民族服飾の概要

民族服飾と一口にいっても、きわめて多種多様なので、小川安朗氏の説<sup>1)</sup>をもとに表1にまとめた。

インドネシアの民族服飾は、このなかのII掛布型に含まれる。

この掛布型のうち、インドネシアの衣裳も含まれる腰に布類を巻きつける衣服型式は巻衣型といわれ、熱帯から亜熱帯の地域で慣用されている原始型衣服である。腰巻衣の型式は、インドから東南へ下がり、東南アジア大陸、マレー半島へ、そして、赤道を越え東へ進みインドネシアへ、さらに、ミクロネシア・ポリネシアなどの南太平洋の諸群島にいたる広い地域に分布している。

これら、東南アジアから東に分布している腰巻衣には二つの系列がある。その一つは筒

表1 服装型式分類表

型式名	特 色	分布地域
I 腰布型	主として腰まわりを紐や布、植物体でおおい、あるいはとりまく型式 ヒップバンド、腰蓑	熱帯地域
II 掛布型	衣服の形に成形されていない、非成形衣料をもって人体をおおい包む型式 腰に巻く腰巻衣も含む パラ、ヒメーション、サリー	熱帯地域 亜熱帯
III 貫頭型	長方形の布地の中央部にある頭を通す孔からかぶって着装する型式 腋下を縫い、袖、衿をつけたものも含む ポンチョ	亜熱帯地域 温帯
IV 前開型	カフタン型ともいわれ、前割り、前合わせ、帯しめ方式の上下連続 ワンピース型式 カフタン、和服、蒙古服	温帯地域
V 体型型	人体の型と同じ形に造形された衣服型式	寒帯地域

型（サロン）で、広幅の布地を1本の縫い目だけで縫った直径の大きい2人分くらいの大  
きさの円筒状のもの、もう一つは全く縫うことの無い広幅の2～3mから、長いものは7  
～8mもある布片だけでこれを腰に巻く着法によるものである。この両系統の腰巻衣を  
着装した外形はほぼ似ているが、細かくみればその合わせ方、襷のとり方が各々の民族の  
特色となっている。

ビルマ、タイなどの赤道より北にある地域では筒型、巻型とが両方用いられているのに  
対し、南太平洋の島々にくると、すべて巻型のみとなっている。

インドネシアでも両方用いられ、儀礼用には男性が巻型、女性が筒型というのが比較的  
多いが、ジョクジャカルタやスラカルタでは、男女とも巻型が一般的である。

上半身についてみると、南太平洋の島々では裸出しているのに対し、大陸及び大陸に近  
いインドネシアまでは、原則として筒袖の上衣を着装している。

### 男子の服飾について

今日、ジョクジャカルタやスラカルタで見かける服装は衿付きのカッターシャツ、ズボ  
ンで、若い世代になるとTシャツとGパンが多くを占める。公式の場では背広が用いられ、  
民族服飾を着けるのは結婚式における花婿、ガメランを奏する楽人などごく一部に限られ  
てしまっている。

民族服飾の構成は、ジョクジャカルタ、スラカルタともほぼ同じで、ターバン風のかぶ  
りもの、人体型成された上衣、腰巻の下衣を着け、スリッパ型のサンダルを履く。さらに、  
剣を背中に差すが、バリ島でみかけられるかんざしの様なアクセサリはしない。

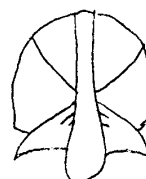
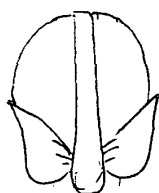
かぶりもの ジョクジャカルタではブランコン（Blangkon）、スラカルタではディス  
タル（Destar）と呼び方が違い、形も図1-①、②に示すように、正面、後面とも各々  
異なる。



図1-①かぶりもの  
(ジョクジャカルタ)



図1-②かぶりもの  
(スラカルタ)



これはもともと、カイン（布）・カパラ（頭）という風呂敷の様な正方形のバティックをターバン風に巻いたものである。昔は頭の一部と考えられ、脱ぐことはなかったということである。また、結び方も色々あり、階級、年齢等によって、形、色、文様に厳密な区別があった。最近では、帽子のように形を整え、縫い上がった既製品が売られている。

上衣 上衣は、ジョクジャカルタ、スラカルタとも人体の形に造形された衣服型式で、その形は図2-①、②に示すように2つの地で全く異なる特徴を有している。

まず名称だが、ジョクジャカルタではこの上衣をソルジャン（Sorjan）と呼んでいるのに対し、スラカルタではビスカップ（Beskap）と呼んでいる。

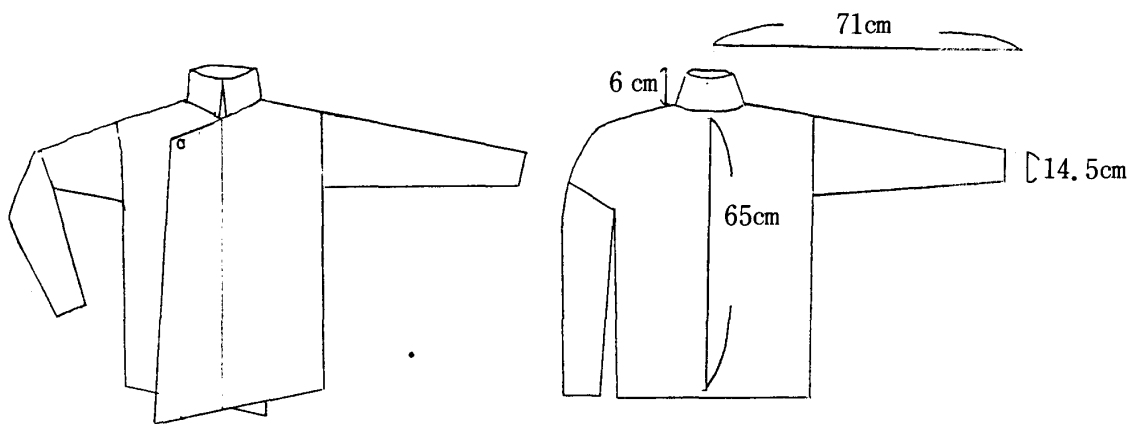


図2-① ソルジャン（ジョクジャカルタ 男子上衣）

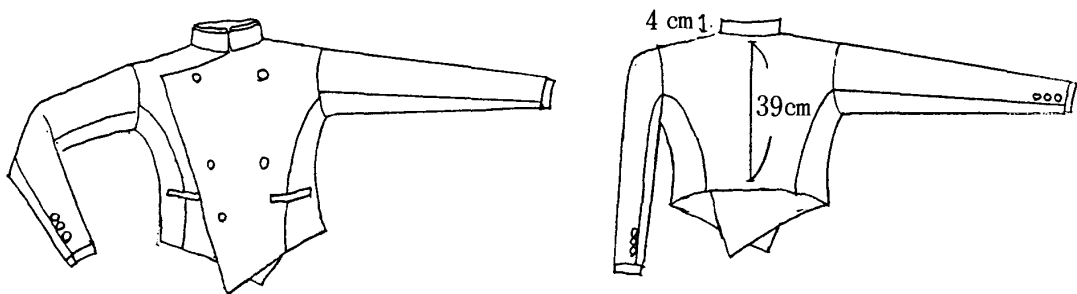


図2-② ビスカップ（スラカルタ 男子上衣）

ソルジャンは身丈が65~70cm, 前中心に衿のような足し布が付き, 深く重なりダブル仕立てとなっている。袖は1枚袖のタイトスリーブで, かつ, 脇線と袖付線が続いた日本の着物の裁断に近いドロップショルダー Sleeves である。衿は幅6cmの立衿で, 深く首を包む。衿幅が広いので, 衿にはたてにボタンが付き留めるようになっている。身頃は表に飾りボタンが2つあるだけで, 左前身頃に持ち出しを付け, 内側で留めるよう仕立てられている。

松本敏子氏の調査報告<sup>2)</sup>によれば, この上衣の形はメソポタミアのものに類似しているということである。マホメットの死後, アラビア民族はシリア, メソポタミア, イラン高原へと大征服を行った時期があり, インド以西にもイスラム文化の花を咲かせ, 宗教, 文化, 風俗も運んだのであるが, その名残りであろうか。

昔は地質が木綿で, 文様は黒, オレンジ, 白の3色の縞であった。これも, イスラム教は生き物の像を表現することを戒め, 自然物の模写を禁じている宗教なので, 縞文様を用いていたと考えられているが, 今回見せていただいた衣裳は青の無地で, 素材は不明だが, レース織であった。

ビスカップはソルジャンよりさらに成型度が高く, ソルジャンが直線的な構成線が多かったのに対し, パネルラインなどを前後身頃の構成線として用い, 人体にフィットさせた服となっている。後丈は39cmと非常に短い。左右の身頃の前打ち合わせを深くしたダブルプレストで, 実際に留めるボタンと飾りボタンが2列に並んでいる。袖は2枚袖で, 腕付根線に袖付線のあるセットインスリーブである。衿幅はソルジャンの半分に近い4cmで, 留めボタンはない。袖口からカフスの様に別布をのぞかせ, また, 衿を二重にして下にシャツを着ているように見える工夫をしている。柄は無地で, 素材は絹であった。

ソルジャンもビスカップも, 袷仕立てで長袖である。インドネシアのような暑い国に適さない形態であるが, 肌を見せぬというイスラム教の戒律に忠実に従っているスタイルなのではないかと推察される。

下衣 腰丈の長さである幅90~110cm, 長さ2~2.5mのカイン・パンジャンという長方形の布を着用する。カインは布, パンジャンは長いという語意をもつ。これを男子が着用するときは, ジョクジャカルタでも, スラカルタでもブブド (Bebed) と呼び, 女子が着用するときはタピ (Tapih) と呼ぶ。カイン・パンジャンは布全体にバティックを施したもので, 地質は木綿である。バティック (Batik) とは蠟防染のことで, ジャワ島の染織はバティックにつきるといっても良いぐらい, ジャワ島の広範な地域で作られている。バティックは各地の王宮で発達したものであるが, 大量生産によるバティックの一般化に伴い, 色, 柄について地域的な特色の明確さは失われてきた。しかし, ジョクジャカルタやスラカルタにおけるバティックは, 伝統的な様式を比較的良く残しているといわれる。ジョクジャカルタで使われるカイン・パンジャンとスラカルタのものでは, 大きさ, 地質に違いはないが, バティックの色調が異なる。ジョクジャカルタのバティックはソガ染料

で染められたカイン・ソガン (Kain Sogan) で茶色系の色調をもち、白く染め残した部分の多い地色の明るい文様である。これはラタル・プティ (Latar Putih) (写真1) と呼ばれるものである。また、布の両端、あるいは四方の縁を白く染め残しているところに特徴がある。それに対し、スラカルタのバティックは同じカイン・ソガンで茶色系がベースであるが、白く染め残した部分が小さく、ラタル・イルン (Latar Ireng) (写真2) と呼ばれる地色が茶、または青の暗い色調である。そして、布端は白く染め残さない。これらは一見してわかる違いである。

ブドの着装形態には、松本敏子氏の1973年の調査<sup>3)</sup>によれば次の4種類があったという。1. カチュハン (Kajshan) 布を腰のまわりに一卷きし、余った部分をプリーツにたたみひとつにまとめて、前中央で垂直にたれるように帯でとめる。2. クンチョガン (Kentjongan) 裾を上部につり上げるように襞を作り、帯にはさんでとめる。3. プラジュリタン (Pradjurittan) 裾を右側で腿のところまではしよる方法。4. ウォロ (Wala) 布地を腰に巻き前身にくる上端を固くねじって、はさみ込むように胴囲でとめる。同氏の報告によれば、この時点では1. のカチュハンが一般的であったということだが、今回見せていただいたブドの着装形態は、1. のカチュハンをさらに簡単にしたものだった。ブドの着装法はジョクジャカルタ、スラカルタともほぼ同じであった。まず、右布端を幅6cmのプリーツだたみにする。プリーツの部分はアイロンで折り目をはっきりつけ、そ

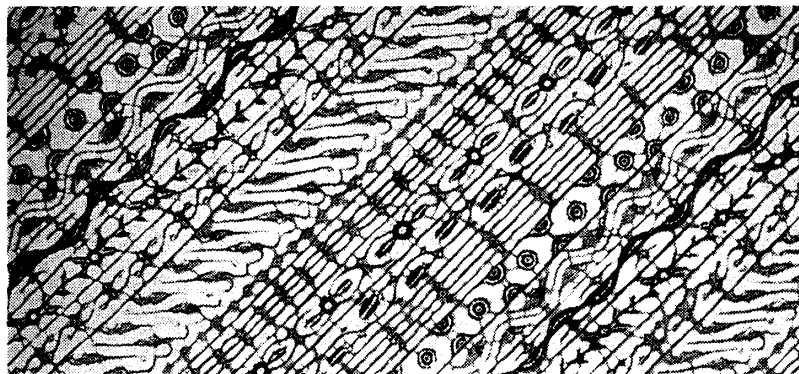


写真1 ラタル・プティ (ジョクジャカルタ) <sup>7)</sup>

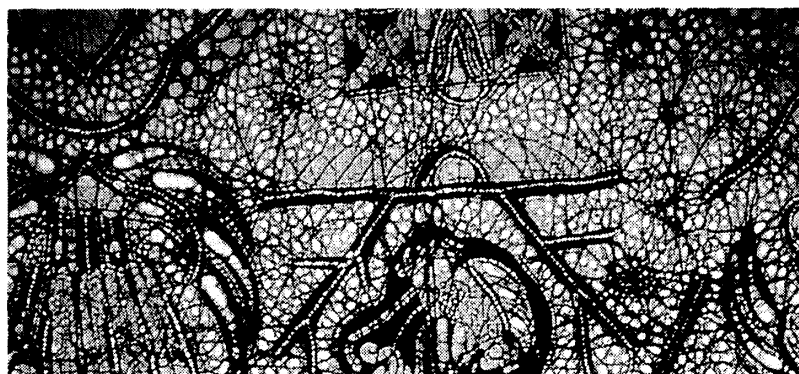


写真2 ラタル・イルン (スラカルタ)

の上部は襷が崩れないようにクリップでしつけてある。プリーツの本数は7, 9, 11本のいずれかにする。このプリーツは儀礼用のブドには必ずつけられるものだということがある。1回転半巻きつけられるよう左布端を折りたたみ、布の長さを加減する。襷部分を前面中央において、襷部分が隠れないよう襷のつとめである右布端が上になるよう巻きつけてひもで結ぶ。後中央にきた左布端の上部を引き出し、全体の形を整える。この後、ジョクジャカルタでは日本の伊達巻程度の幅で、綿芯の入った厚みのある帯をひもの上に3回巻き、その帯の中央（ほぼウエスト位置）にカムス（Kamus）と呼ばれるバックル付きのベルトを巻く。それに対し、スラカルタではひもの上に下帯をしめ、さらにロントン（Lonton）といわれる帯を巻く。これはジョクジャカルタのものとは異なり幅が広く、一枚布で長い。これを胸から腰にかけて上から段々に巻き、最後にバックル付きのベルトをウエスト位置より下につける。

カイン・パンジャンを拡大した形のものに、ドドト（Dodot）という腰衣があり、かつて王侯・貴族の礼服として正装用にもちいられていたが、今回見せていただいた衣裳のなかには含まれていなかった。

剣 剣は長さ48cmで、ジョクジャカルタ、スラカルタともクリス（Keris）と呼んでいるが、柄の形が多少違っており、どちらも背面、ロントンの中に差す。（写真3-①、②）



写真3-① クリス  
（ジョクジャカルタ）



写真3-② クリス  
（スラカルタ）

## 女子の服飾について

今日見られる服装は男子と同様、ほぼ洋装が普及している。特に学生などの若い世代はブラウス、スカートより男子と同じように、Tシャツまたは、シャツブラウスにGパンを着用し、服装の性別同化傾向が強い。ただ男子と違うのは、60歳以上とみられる年配者で、地方から行商や観光でジョクジャカルタに来ていた人には、民族衣裳である腰巻の着用が日常着としてみられた。民族服飾には、変遷における停滞残存の原則、つまり、中央都市から離れた地方村落においては服飾が展開せず、旧態が残存するという原則があるが、今回のインドネシア訪問で少ない例ではあるが、その原則を確認することができた。ジョクジャカルタ、スラカルタでは、女子も民族服飾を着用するのは公式の場や、儀式の場などの限られた機会だけになってきている。

服飾の構成は、ジョクジャカルタ、スラカルタともほぼ同じで、形成型の上衣、下衣は腰巻、胸部から腰部にかけてキャミソールを着用し、帽子はかぶらず、かつらをつけ、様々な種類の装飾品をつける。

髪 ジョクジャカルタ、スラカルタとも前面、側面を大きくふくらませ、この部分はスングル (Sunggar) といい、後ろにドーナツ型の大きなまげかつらをつける。このかつらはジョクジャカルタではウクル・タクツ (Ukel Tekuk)、スラカルタではウクル・コンディ (Ukel Konde) と呼ばれ、男子のかぶりものと同様、ジョクジャカルタとスラカルタでは形が異なる。(図3-①, ②) ジョクジャカルタ、スラカルタどちらもかつらの後面上部にチュンドック・プータット (Cunduk Petat) と呼ぶ、金の半円形のかんざしをつける。後面側部にはプニティ・ランタン (Peniti Renteng) と呼ぶ小さな3つの円形状のものを鎖でつなげた飾りをつけるが、未婚、花嫁は生花 (ジュプハン (Jebahan) と言いが変わる)、既婚者は金である。さらに、後面中央にチュプロット (Ceplok) という赤い花をつけ、これも未婚、花嫁は生花、既婚者は造花を用いる。まれに、自毛で髪を結う場合があるが、チュポール (Cenpol) というつけ髪をつけてボリュームを加える。

上衣 上衣はジョクジャカルタ、スラカルタともにクバヤ (Kebaya) と呼ばれる形

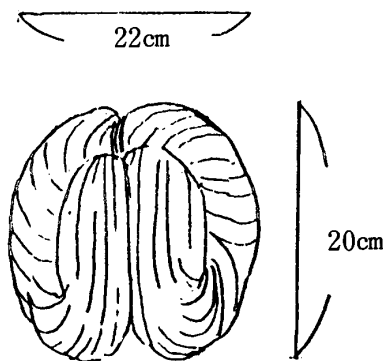


図3-① まげかつら  
(ジョクジャカルタ)

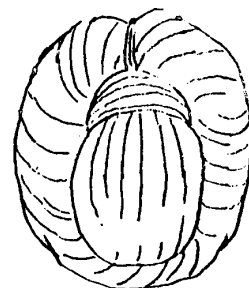


図3-② まげかつら  
(スラカルタ)



成型衣服である。(図4-①, ②) 着丈63cmで、衿は身頃から裁ち出したへちま衿、前開きのオーバーブラウス、袖は1枚袖でタイトの長袖である。前後身頃ともにバストポイント下のウエストダーツがあり、さらに、脇線をカーブさせて体幹部にフィットするよう裁断されている。2つの間で相違する部分は胸当ての有無である。スラカルタのクバヤには、胸当てとして巾12cm、丈17cmの小さな布が前身頃につけられている。それに対し、ジョクジャカルタのクバヤには胸当てがついておらず、前端を突き合わせにしてホックで留め、ホックを隠すように金で円形のプニティと呼ぶブローチを3つつける。また、ジョクジャカルタのクバヤには袖口、裾、衿つけ回りなどにリスト(List)と呼ばれるブレードが縫

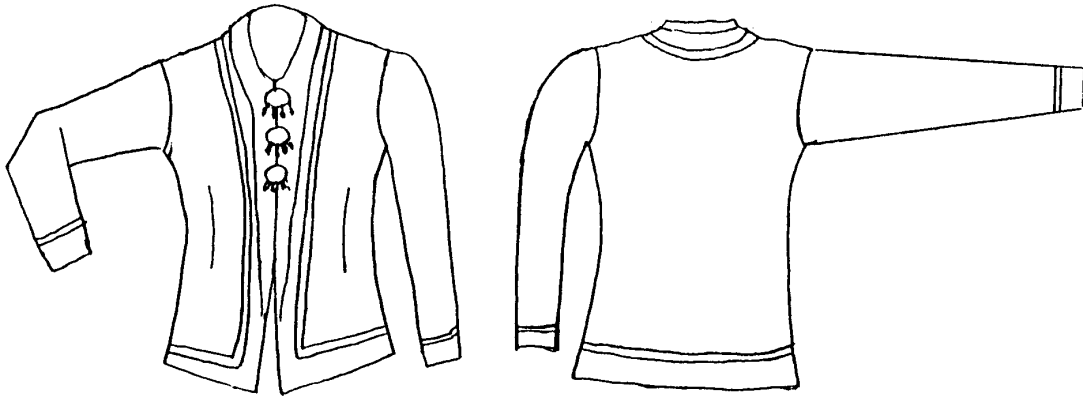


図4-① 女子上衣 (ジョクジャカルタ)

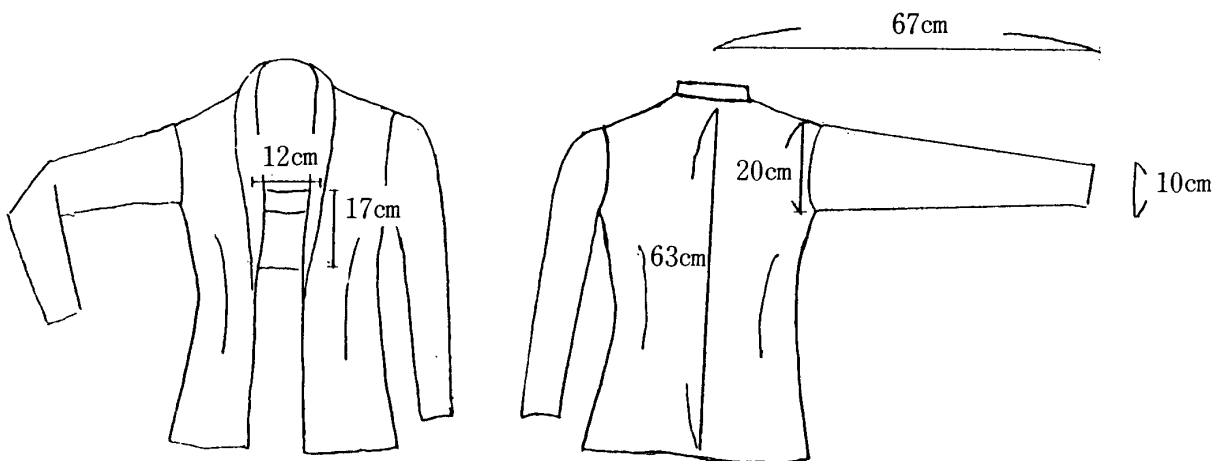


図4-② 女子上衣 (スラカルタ)

い付けられ、この部分もスラカルタのクバヤと相違する部分である。素材はどちらも不明であったが、薄いレース地で単衣仕立てであった。

下衣 男子と同様、カイン・パンジャンという長方形の布を巻きつけていく。このカイン・パンジャンについては先に記述した通りで、柄、大きさに男女の区別はないが、同じカイン・パンジャンでも女子が着用する場合はタピと呼んでいる。松本敏子氏の調査<sup>4)</sup>では女子の腰巻の形態にも、1. スンボン (Sembog) 特殊な折目をつけ長いトレーンを引き、絹の帯をしめ前に長くたらす。2. サンプル (Sampur) 裾をヒップの線までまくり上げて、帯で結びつける形。3. チョントカン (Tjontokkan) 裳裾を大きくふくります着方の3種類があったということだが、これらは、おもに王侯貴族階級で用いられたもので、現在では舞踊衣裳で見られるだけである。今回見せていただいた形態は男子のカチュハンに似ており、非常にシンプルで、ジョクジャカルタ、スラカルタの間に巻き方の違いはみられなかった。着装方法は男子と異なり、まず左布端にプリーツを作る。本数は男子と同じだが、幅が2.5cmと細い。次に、裾からのぞかないよう右布端の下を三角に折り上げ前にもってくる。そして、裾幅が細くなるよう身体を中腰の状態にして、プリーツが前中心にくるよう全体の長さを加減しながら、そのまま2回腰に巻きひもで結ぶ。ひもの上をジョクジャカルタではスタゲン (Stagen) と呼ぶ幅15cmの帯を、スラカルタではアンケンという帯を巻く。

キャミソール 松本敏子氏の調査<sup>5)</sup>では、タピを巻き終わるとクバヤを着用する前に、胸部から腰部にかけてクンブンと呼ばれる巾12.5cm、長さ4.8mの日本の伊達巻に近い感じの細い帯を巻くと報告されている。これは、黒地に金糸が織り込まれているもの、その他絞染め、絹織物、手描きのバティックなど、また色も多彩であるとなっている。しかし、今回はクンブンを用いず、ウエストニッパーとブラジャーが繋がった形のファンデーションとキャミソールを着用していた。このファンデーションでバストの豊かさとウエストの細さを強調するよう体型を整え、さらにその上にファンデーションと同形で、クバヤと同色のキャミソールを着る。クンブン胸部から腰部にかけてたるみなく巻くのは1人では困難なので、ワンタッチで着用可能なキャミソールにかわったのではないかと推察される。このキャミソールは人体にフィットしたデザインになっているので、クバヤを着れば人体に直接巻きつけるクンブンとはほとんど区別がつかない。もともとは上衣であるクバヤをつけず上半身はクンブンのみというのが正式であったが、クバヤの着用がクンブンの簡略化を進めるという変化がここに認められた。これは、ジョクジャカルタ、スラカルタいずれにおいても同じであった。

また、クンブンから発達したといわれるものでスレンダンという肩掛がある。これは巾31cm (二つ折りにして使用)、長さ1.85mの布で、最初宮中でアクセサリとして用いられていたのを庶民が模倣するようになり、ジャワの民族服を特徴づける1つのスタイルとなったといわれるが、この儀礼用に片肩に布を掛けて装う風習は東南アジア共通のもので

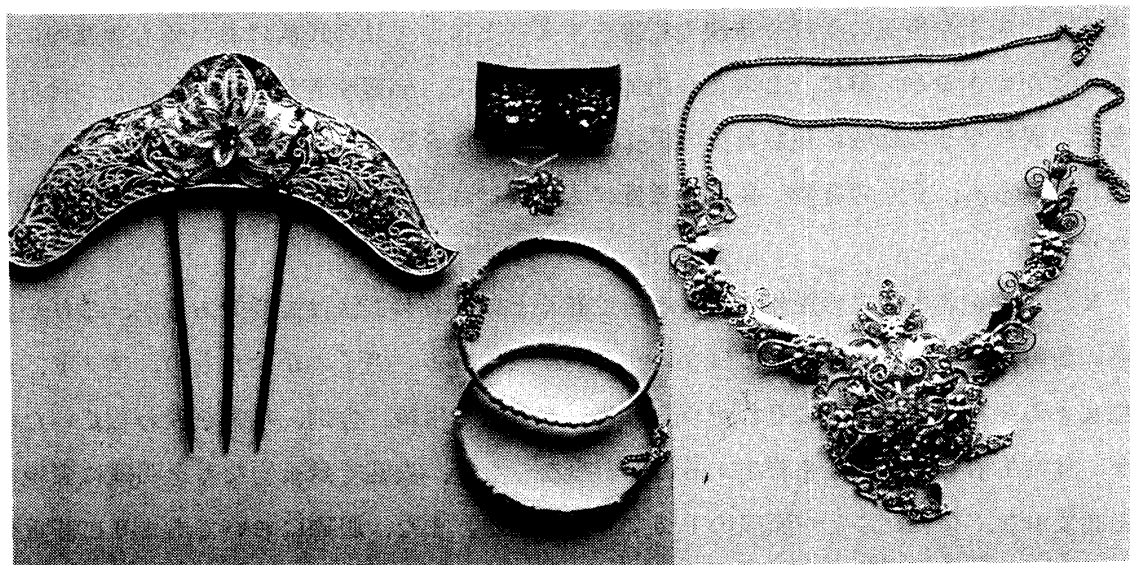


写真4 女子装飾品

もある。今回紹介していただいた衣裳にスレンダンは含まれておらず、たまたまもれていたのか、それともクンブンと同様退化の方向に進んでしまうのであろうか。ただ、スレンダンは暑い時には直射日光を避けるかぶりものとなったり、荷物や赤ん坊の横抱きの帯代わりにも用いられることがある。

装飾品 クンブンやスレンダンのように簡略化されるものとは逆に、必要だとして利用されると次第に発達していくものもある。装飾品がそれにあたると考えられる。松本敏子氏の調査<sup>6)</sup>では、装飾品についてはスレンダン以外に報告されておらず、その写真資料にも見当らなかつた。しかし、今回見せていただいた女子の民族衣裳のなかで、アクセサリも服と同様の重みをもって紹介された。ジョクジャカルタ、スラカルタともに、カルン (Kalung) と呼ばれる金または金メッキのネックレス、(花嫁のつけるネックレスはサンクサンガン (Sangsangan) と呼び方が変わる)、クラング (Celang) と呼ばれるブレスレット、スピ (Supe) は指輪で、スンカン (Sengkang) はイヤリングであったが、これらをすべて身につける。(写真4) 民族衣裳が日常着として用いられることが少なくなくなり、儀式、祭礼などの特別の場で着用されることが多くなったことが服飾の外観、外形の美を競い合う服飾心理を刺激して、機能よりも装身効果を重視した過飾の方向へ進んでいくのではないかと思われる。

以上、ジョクジャカルタ及びスラカルタの男女の服飾をまとめてみたが、いくつかの興味深い点を見い出すことができた。

まず、ジョクジャカルタとスラカルタの服飾は概観で述べたように男女とも基本的には上衣と腰巻衣の構成だが、細かなところをみていくと様々な相違点があったということである。50km程度しか離れていない2つの都市の間にこれだけの違いがあるということは日

本では考えにくいことである。祭礼や行事で伝統的な衣裳を身につけ、祖先の着装状態を再現し、先人や祖先の崇拝や業績の礼讃をすることはいずれの民族においても普遍的にみることができるが、特に、この2つの地の人にとって、形態や着装法などに差をつけることで、民族やその地域に住む自分のアイデンティティを確認しているのではないかと感じた。もちろん、多くの背景、要因を考慮に入れなければならないので簡単には結論づけられないが。

また、インドネシアの民族衣裳にとって巻くという着装方法は重要であるが、これが次第に簡略化されてきているのではないかという点である。男子のかぶりもの、ブド、また女子のタピ、クンプンにそれがみられる。巻き方で階級、性別、年齢を表わしていたのが、日常生活で民族衣裳を着用することが少なくなり、衣裳で階級的な差を明確に表現する必要がなくなったことが原因の1つに考えられる。また、服飾においてあまりに荘重化され、複雑重厚な発達を遂げた結果、重圧や束縛からの解放の欲求によって簡略化されることもある。ブドやタピの着装の方法が何種類かあったことは先に記したが、これらは主に支配階級で発達したのだが、支配階級以外にも広まったことや、民族衣裳の着用機会が減ったことが誘因となり、人為的に省略簡素化したということも考えられる。いずれにしても、カイン・パンジャンをシンプルに、またタイトに巻きつけると正面から見たとき男女とも細身のスラックスをはいているようで形成服である上衣ともバランスがとれている。ブドやタピもクンプンがキャミソールにかわったように、さらにその形態が衰退、縮小し、痕跡をとどめるだけになるのであろうか。

そして、着用機会が儀礼、儀式の場に限られてきたことで、実用、機能面より、装身具を利用し装身効果を発揮する服飾へ変化してきていることも興味深い点としてあげられる。腰巻衣は非形成衣服なので、外形的な形態美に乏しく、色彩美に頼るか着装方法を工夫していたわけだが、着装方法は先に述べたように簡略の方向にあり、色彩も茶色系のカイン・ソガンであることから、それに替わるものとして宝石、貴金属など稀少価値をもつ装飾品を身につけることで特別の場にふさわしく装うことになったのであろう。

## おわりに

民族服飾は、その民族をとりまく自然環境及び、その民族を形づくった社会環境に順応して発生し、成長し、さらに展開して民族の性格をもったまま伝承され現在の姿をみせている。その民族らしさを備えた一定の形態や色彩、着装を示すのが民族服飾の特性なのである。今回見せていただいたジョクジャカルタとスラカルタの服飾をまとめるにあたって、服飾の国際同化の傾向が民族服飾の特性へどのような影響を及ぼしたのかという観点からみてきたので、現在ある姿だけの紹介に終始してしまった。しかし、民族服飾を考える場合、その服飾の発生、成長発達、伝承、また民族の性格、気質、気候風土、歴史、伝統、政治経済、宗教などの背景まで深く調査しなければ、表面的な特徴の把握だけで終わって

しまう。今回できなかったこれら多くの背景、また、バリ島などインドネシアの他の地域の服飾を調査、研究し、民族服飾について深めていきたいと考える。

最後に岩切成郎学長をはじめ、貴重な資料を紹介して下さった、タラカニタ社会福祉短大の先生方に深謝いたします。

#### 文献

- 1) 小川安朗：民族服飾の生態，東京書籍，25－30（1979）
- 2) — 6) 松本敏子：足でたずねた世界の民族服 1，関西衣生活研究会，177－195（1979）
- 7) 吉本忍：インドネシア染織大系下巻，紫紅社，5－9（1978）

（1993年1月18日受理）